View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Gunma University Academic Information Repository

育英短期大学研究紀要　第 36 号　（2019 年 3 月）

英米児童文学における「死」の表象とスピリチュアリティ

—— Charles A. Corr の文献（2004）を中心に ——

鵜生川恵美子[1)]

Representation of Death and Spirituality in Death-related English Children's Literature:

Focusing on the Literature by Charles A. Corr (2004)

Emiko Ubukawa

Abstract

Spirituality has been discussed as an important topic in many other settings as well as in medical ones. It has also been considered to possibly emerge when people are under critical circumstances such as death, dying, and bereavement.

Therefore, spirituality can be said to be depicted in death-related literature for children. There are, however, a limited number of researches on death in children's literature. Furthermore, few studies have been published on spirituality in death-related children's literature.

This article presents a brief overview of the trends in academic researches on death-related English literature for children and then introduces Dr. Corr's research on spirituality in such children's literature published in 2004 as an indicator for further research on spirituality in English children's literature.

It is hoped that his research on spirituality in death-related children's literature will be a springboard for similar researches on Japanese children's literature and a comparative study between English children's literature and Japanese one in the spiritual setting.

Key words: representation of death, spirituality, death-related English children's literature, spiritual care

キーワード：死の表象，スピリチュアリティ，死をテーマとした英米児童文学，スピリチュアル・ケア

Ⅰ．はじめに

高度医療の発展、高齢者の増加に伴い、多くの人々が病とともに生きることが余儀なくされる傾向にある昨今、病による苦痛の緩和とともに、Quality of Life（生活の質：以下 QOL）を保障しようとする営みが高まることにより、スピリチュアル・ケア（spiritual care）は、世界の人々が共通に持つ関心ごとになってきている（窪寺 1）。

医療や看護においては、1980 年代からの QOL の概念の発達に伴い、スピリチュアル・ケアに関する研究が発達し、それに伴い、スピリチュアリティ（spirituality）[1] という概念も発達した。

しかし、スピリチュアリティという言葉の意味

1）育英短期大学非常勤講師

や定義については、様々な見解がある。1990 年前後に入ってきた外来語としてのスピリチュアリティを、日本語では、「霊性」「精神性」などと訳すようになった（安藤 7）ことからもわかるように、スピリチュアリティは、精神性や心と深く結びついており、視覚的に捉えることが不可能であることが、確固たる定義を見出すことを困難にさせているのではないだろうか。日本及び英語圏の国々におけるスピリチュアリティの定義についての文献検討からも、ある程度の一定の定義を見出すことは可能であるものの、スピリチュアリティの構成要素についての共通認識や権威ある定義はないと言及する研究者もおり、明確な定義は見いだせていないのが現状である[2]。

医療分野の文献において最も頻繁に使われている Murry と Zentner による定義では、スピリチュアリティは宗教的関係を超え、インスピレーション、尊敬の念、畏敬の念、意味や目的を求める質であり、スピリチュアルな側面は宇宙との調和を試み、無限のものについての答えを求め、人が感情的ストレスや身体的な病や死に直面した時、明確になる（259）としている。

McSherry は、この定義を受け、スピリチュアリティが複雑で多面的なものであり、万人に共通するものであるが、非常に個人的なことであるとし、さらに、宗教的信心を持っている如何にかかわらず、すべての人々に適応される（90）という見解を示している。

西欧から遅れて日本に入ってきたスピリチュアリティの定義を、日本におけるスピリチュアリティ研究の第一人者である窪寺俊之は、次のように定義している。元来、キリスト教と深く結びついていたスピリチュアリティという概念を、日本人にも理解しやすいように説明しているので引用しておきたい。

> スピリチュアリティとは、人生の危機に直面して「人間らしく」「自分らしく」生きるための「存在の枠組み」「自己同一性」が失われたときに、それらのものを自分の外の超越的なものに求めたり、あるいは自分の内面の究極的なものに求める機能である（8）。

上記のように示されたいくつかの定義から、スピリチュアリティは、人生の危機的状況において、人が人生の意味を見失うことなく人間らしく生きていくために、個個人の心の中から湧きあがり、他者との関係性や人を超えた偉大な力や存在に助けを求める、人間固有な特質といえるのではないだろうか。

人生において重大な問題を喚起する出来事の一つは、死の危機である。死の危機はスピリチュアリティを覚醒し、達成不可能になったそれまでの人生の意味や目的に代わって、新たな意味や目的を見つけ出そうと働く（窪寺 13）。普段はほとんど意識されないスピリチュアル・ペインが、危機的状況によって顕著に表れ、その際に、スピリチュアリティというすべての人間が持っている生得的性質が覚醒する（窪寺 49）。このことから、スピリチュアリティは、「死」という危機的な状況によって引き起こされ、「生」についてのより深い理解と洞察に結びついていることがわかる。

窪寺は、スピリチュアル・ペインに対する具体的なケアの一つとして、「自然」「文化」「芸術」によるケアを挙げ、音楽や絵画など身近にある芸術品は、スピリチュアル・ケアにとって有益な道具であり、童話や絵本は、患者の状態に合わせて用いるときにスピリチュアルな問題を扱う道具として有効であると述べている（82）。

童話や絵本は、子供のための文学と考えがちであるが、絵本という表現ジャンルは、子供のためだけではなく、年齢や世代を超えて共有できるものである（柳田 14）。大人にとっても、幼い時に親しんだ物語は、親近感がわき、心の解放に有効であると同時に、スピリチュアルな問題が隠されていることが多いのである（窪寺 84-85）。

河合隼雄は、心理療法家としての立場から、ス

ピリチュアリティの語源であるスピリット、つまり日本語で言う「魂」という、大人が見逃しがちな現象を捉えるのに、「子供の目」は確実であるとし、子供の本の存在意義（35）を訴えた。

やまだようこは、現在のリジリエンス研究でも重要視されるようになった「ものがたり」の効果について論じ、「物語」のリジリエンスは、弾力や柔軟性という意味で、重大な危機や逆境に直面しながらも、徐々にプラスの方向へと転換していく力であり、リジリエンスと物語による「意味付け」の仕方には大きな関係がある（167）と説明している。

童話や絵本など書物によるケアに焦点を当て、スピリチュアリティがどのように描かれ、どのような効果をもたらすのかについて探求することは、死に直面する人々や死別を経験した人々の心的ケアの方法として、また、死の教育（デス・エデュケーション）において、死に関する問題に取り組む機会を提供する材料として、童話や絵本などの物語の持つ意味を、スピリチュアリティという視点から捉えるうえで、有益な示唆を与えてくれるであろう。

本論では、上記の研究を進めるための基礎的な段階として、日本に先立ちスピリチュアリティの重要性に目を向けた英米における、死をテーマとした児童文学に関する研究動向を概観し、研究対象とした文学作品において描かれる死と、そこから引き出されるスピリチュアリティがどのように表現されているのかに関する Charles A. Corr[3]（以下 Corr）の論考を中心に検討する。本論は、取り扱う文献には限りがあり、一般論を導き出すには至らないかもしれないが、今後の研究の一助となることが期待できよう。

Ⅱ．研究対象としてのスピリチュアリティ

Marian de Souza は、「私はスピリチュアルであるが信仰心はない」という表現が散見されるようになったことを指摘し、このことは、宗教的であろうとなかろうと、21 世紀にスピリチュアリティについての興味や関心が高まっていることを明確に示唆するものである（2）としている。

加えて、依然は宗教的分野における関心ごととしてみなされていたスピリチュアリティが、アカデミックな分野においてその位置をとどめられるようになったのは、比較的最近のことであると述べ、その第一の理由として、ごく最近まで、子供のスピリチュアリティや一般的なスピリチュアリティについて発表するアカデミックな場がなかった（v）ことを挙げている。

英国において、学校教育におけるスピリチュアリティの重要性は 1988 年の教育改革法において再度強調され、1996 年 9 月には、どのようにスピリチュアリティが、教育や関連した分野において取り扱われるのかについての議論を活性化することを目的として、International Journal of Children's Spirituality が発刊された（v）。ここでは、文学におけるスピリチュアリティに関する論文が多く発表されているが、文学、特に児童文学におけるスピリチュアリティに焦点を置いた研究は、1990 年代以降から見られ、WHO（World Health Organization：世界保健機構）の健康の定義の中にスピリチュアルという表現が加えられることが提案された[4] 時期とほぼ一致している。

このことは、医療分野においてはもちろん、教育及び芸術など様々な分野においても、スピリチュアリティが、宗教にとって代わる、万人に共通した死に対する考え方、そして生き方の指針として、重要な役割を果たし得るものであることを示唆しており、今後、スピリチュアリティ研究が、多岐にわたる研究分野において促進されることが期待される。

Ⅲ．死をテーマとした英米児童文学の研究

スピリチュアリティが、死などの危機的状況に置かれたときに覚醒されるということから、死をテーマとした文学作品において、その特性が描かれるのではないかという推測は想像に難くない。そこで、本論では、死をテーマとした英米の児童文学におけるスピリチュアリティに焦点をおいた研究を行っているCorrの論考を検討していくこととするが、その前に、死をテーマとした英米の児童文学を対象とした研究の動向を概観するために、入手可能な限りある資料から以下の表を作成したので、簡単に触れておきたい。

刊行年	書　名	著　者	概　　要
1976	Death and Dying in Children's Literature: An Analysis of Three Selected Works	Robert G. Delisle & Abigail S. Woods	児童文学における「死」や「死にゆくこと」についてのテーマは新しいことではないとしたうえで、子供の死に対する反応、教室や図書館で子供達が「死」や「死にゆくこと」について対処する際に選ぶ本の基準を確認することを目的としている。3冊の児童文学（*Charlotte's Web, The Magic Moth, A taste of Blackberries*）を選び、Elizabeth Kubler-Ross[5]によって確立された枠組みに照らし合わせ、「死」や「死にゆくこと」についての適切な考えを提供し得る作品か否かについて調べている。
1976	Children, Death and Literature	Carol Romero	死について子供たちに教える際に、児童文学を活用することにおいては賛否両論あるが、死をテーマとする児童文学が見出される頻度が高くなったことは批評家の間でも容認されていることを確認している。加えて、このような児童文学が、子供達が死に対する認識を高めるために有益であることを期待するとしている。
1993	Death Themes in Literature for Children Ages 3-8	Dinah Seibert & Judy C. Drolet	3歳から8歳の子供のための文学において、死がどのように表現されているのかについて調査している。死のテーマは子供の発達に合わせて、前向きにかつ現実的に表現されているため、児童文学は死の教育の教材として相応しいと結論づけている。
1995	Children, Death, and Fairy Tales	Elizabeth P. Lamers	ここ100年ほどの間に、子供と死に対する人々の考え方が変化した、その歴史的背景とグリム童話を中心とした童話における死に関して具体的な解釈を加えている。さらに、死をテーマとした児童文学の作品リストを作成している。
2004	Bereavement, Grief, and Mourning in Death-related Literature for Children	Charles A. Corr	死別、悲しみ、哀悼に焦点を当てて選択された99冊の死をテーマとした児童文学作品を七つの項目に分類している。さらに、調査した作品から導き出された、死別を経験した子供達を手助けするためのアドヴァイスを提示している。
2004	Spirituality in Death-related Literature for Children	Charles A. Corr.	本論で詳述する。
2008	The World's Full of Amazing Thing: Death and Spirituality Represented to Children in E. B. White's *Charlotte's Web* and David Almond's *Skellig*	Laura Salonen	E. B. White（1898-1985）の *Charlotte's Web*（1952）とDavid Almond（1951-）の *Skellig*（1998）の書かれた年代と国の異なった二作品を取り上げ、英米を含む西欧社会における死のテーマと、それに関連したスピリチュアリティに焦点を置いて論じている。読者である子供にとって、死やスピリチュアリティがどのように表象されているかについて分析し、子供の教育においてこのようなテーマについて学ぶことの重要性についても言及している。（下線は筆者による）

刊行年	書　名	著　者	概　　要
2011	Images of Heaven and the Spiritual Afterlife: Qualitative Analysis of Children's Storybooks about Death, Dying, Grief, and Bereavement	Nancy L. Malcom	死に関する児童文学におけるより広範囲な文化的メッセージを調査したリサーチ・プロジェクトに端を発した、天国とアフターライフのイメージに関する研究。ここでは、「死」や「死にゆくこと」についての子供の本の中での、天国の概念や、スピリチュアルな死後の世界の描写に焦点を当てている。これらの本を体系的に分析することによって、天国やスピリチュアルな死後の世界についての社会全体が抱く見解のみならず、天国の概念を使って子供達が自分たちの悲しみを克服できるように励ます方法の可能性を示している。（下線は筆者による）
2014	Death and Dying in Adolescent Literature	Ashley Snoddy	思春期文学は、Elizabeth Kubler-Ross による悲しみの 5 段階に沿って描かれているのか否かについて、7 冊の児童文学作品を対象に分析している。5 段階の全てを含んだ作品は 1 作品のみで、他の作品では、5 段階のうちいくつかが欠けているという結果となった。五つの段階全てを経験する必要はないとするも、五つの段階があることを再認識し、それらを経験することの重要性を訴えている。
2014	A Less than Perfect World: Representation of Death in Award-Winning Picture Books	Kathryn R. Comella	1990～2013 年の間で合衆国（Caldecott）、カナダ（Governor General's Award for English-Language Children's Illustration）、英国（Kate Greenaway Medal）、オーストラリア（Children's Book Council of Australia's Best Picture Book of the Year Award）において受賞した絵本の中に描かれた死について調査している。子供のための死の教育の有益性について示す研究が続けられている傾向にあるものの、上記の賞を受賞した文学作品の中に、「死」や「死にゆくこと」を描写し、死がもたらす感情に対処する方法を学べる機会を提供するものがかなり少ないことを明らかにしている。
2017	Literary Representations of Death, Dying and Bereavement in Children's Literature	Klara Charlotte Schroth	1980 年以前の児童文学と現代の児童文学において、「死」、「死にゆくこと」、「死別」がどのように表象されているかについて比較検討している。1980 年以前のこのテーマに関する児童文学では、Elizabeth Kublor-Ross の考えに基づいたテーマに強く影響を受けているが、現代の児童文学は、読者とプロットとの関係をより近づけ、プロットを読者自身が解釈し、自身の経験に適応させる傾向がより強くなっているとしている。

Malcom によると、子供に、年齢にふさわしい「死にゆくこと」、「死」、「悲しみ」、「死別」についての情報を提供することを目的とした文学作品は多く、増加の一途をたどっており、「死」、「死にゆくこと」を扱った子供の本は、早いもので 1940 年代、50 年代に登場したものがあるが、ここ数十年の間に、「悲しみ」、「喪失」についての問題を扱う親子向けの本は、爆発的に増加している（54）という。

死を扱った児童文学が入手しやすくなったこと、文学が子供の危機的状況に対する対処の手助けになるという専門家の推薦があることにより、親や悲しむ子供の世話をする人々が、このような本を子供の質問に答える手助けとして活用していると言及している一方で、このような本において、子供の悲しみについて語ること、特に、本の中で描かれている天国や、アフターライフに関するメッセージについての研究はほとんどない（55）と述べている。

上記の表から、死をテーマとした英米の児童文

学の研究は、1970年代にはすでに散見されるものの、その数は少なく2000年代に入って定着してきている様子が窺える。とはいえ、スピリチュアリティに関する言及を含む、あるいはスピリチュアリティやスピリチュアルな世界に焦点を当てた論考が希少であることも明確に示されている。

本論では、スピリチュアリティを焦点としたごく少ない論考の中でも、今後の研究にとって、より有意義な見解を示していると考えられるCorrの論考に関して、研究背景、意義、研究方法と結果、考察について、その要旨を次章において示す。

Ⅳ．C.A. Corr. による「死に関する児童文学におけるスピリチュアリティ」（2004）に関する総合的文献検討

１．研究背景

Corrは、死をテーマとした児童及び思春期文学に関する注釈付き目録を準備していく際に、このような文学には、あまり探求されていないトピック、特にスピリチュアリティに関連したテーマが多いことに気づいた。それにもかかわらず、死をテーマとした児童及び思春期文学に現れるスピリチュアルな側面については「死」、「死にゆくこと」、「死別」に関する分野の専門家によって発表されていないという現状があることを指摘した。加えて、大人でも子供でも死に関する出来事について生じる疑問において、スピリチュアルな問題は共通したことであるのにもかかわらず、死をテーマとした児童文学におけるスピリチュアリティに対する専門家の関心の低さは、驚くに値する（365）と述べている。

このように明らかに欠けていた注目をこのテーマに向けさせ、子供が、また子供と共に親が読むべき、死をテーマとした児童文学に対する理解が深まることを望んでいる（366）と結び、この研究の背景としている。

２．研究の意義

Corrは、このような分析を行う意義に関して、少なくとも四つの理由があるとし、次のように述べている。

1）児童文学の筆者らが、「死にゆくこと」、「死」、「死別」に関連したトピックを論議する際、スピリチュアリティに関して子供たちに伝えるべきことは何であるか、さらに学ぶことは興味深いことである（366）。

2）スピリチュアリティに関連したトピックに対するアプローチは、あまり一般的ではないが、そのようなアプローチを実践する機会を、このような児童文学は提供する（366）。

3）子供向けの死に関連した文学におけるスピリチュアルなテーマについての分析は、大人にとっても、またこのような研究を行う大人にとっても価値があることである。若い読者にふさわしい方法で、複雑で抽象的なスピリチュアルな考えや価値、「死にゆくこと」、「死」、「悲しみ」、「死別」に関連したテーマに関する信念について述べることは非常に困難なことであるが、基本的な信念を、若い読者が理解可能な具体的な形にすることが、何が真に基本的なことなのかを理解する手助けとなり得る（366）。

4）子供達に死について教育する責任を課せられた専門家、牧師、看護師、ソーシャル・ワーカー、パストラル・ケア・ワーカー[6]、カウンセラー、病気の子供や死別を経験した子供のケアに携わっている人々、児童文学の出版にかかわる専門家など他の分野の人々にも、死に関連した子供の本について学ぶ機会を提供する（367）。

上記四つの有意義な研究目的を挙げたうえで、この論文のメインの作業を取り上げる前に留意することとして、次の2点を挙げている。1）すべての死に関する本がスピリチュアリティに関連した問題を提供し得る内容を含んでいるとは限らない

こと、また、2）このようなスピリチュアリティに関連した研究においては、宗教とスピリチュアリティとの間にある曖昧さから生じる長期にわたって存在してきた困難さがあるということである。

限られた時間の中で、宗教とスピリチュアリティの間にある相違に関しての曖昧さや不一致について言及することは差し控え、本研究では、宗教ではなくスピリチュアリティの研究であることを断言することが重要である（368）としている。

３．研究方法と結果

Corr は、死をテーマとした 49 冊の児童文学作品を、スピリチュアリティの中心的テーマとして挙げた、「人生の意味」、「関係性」、そして「超越性」[7] の各項目ごとに分類し、どのようにこれらのテーマが描かれているかに焦点を当て、それぞれの作品ごとに解説を加えた。「人生の意味」をテーマとした作品は 16 冊、「関係性」をテーマとした作品は 14 冊、「超越性」をテーマとした作品は 19 冊に分類された。

本研究での分析では、基本的に、これらの三つのテーマのそれぞれに対して、1 冊の本を結びつけているが、実際は、物語が展開されるにつれ、一つ以上のテーマが現れる可能性があることにも注目する必要がある（368）としている。

以下の表では、Corr が研究対象として選んだ作品のうち、特にスピリチュアリティのテーマが分かりやすく表現されていると思われる作品を筆者が選択し、刊行年、書名及び Corr による概要を示した。

１）「人生の意味」

死に直面しながら、人生の意味を見いだすという苦難な状況に関する問題を扱うとき、若い読者のために多様な意味を整理する手助けとして、Robert Jay Lifton（1979）が提示した枠組みを活用することが可能であるとしている。人は人生において、価値があり、意味があると思ったものであれば何であっても、死後もその命が続いているということを見出す方法を求めるものである。次に挙げる四つの象徴的不滅（生物学的、社会的、自然的、神学的）のうち一つ以上の不滅（不死）を通じて、死後も続く命を見出す方法を追求しているのだ（369）と説明している（以後示される英語の見出しに対する訳語は筆者による）。

1)−1　「生物学的不滅」（子孫による命の継続）

刊行年	書　名	概　　要
1964	*My Turtle Died Today*	ペットのタートルが死に、埋葬された後、子供達は、生命は新しく生まれる子猫となって、別の方法で生き続けるのだと考える。
1975	*The Garden Is Doing Fine*	死に逝く父から、父の愛していた庭について問われ、その庭も枯れてしまったことを伝えるべきか否か迷う娘 Corrie は、ある賢明な隣人の助言により、自分と兄弟こそが、父にとっての本当の庭であり、父親が植えた種は、まさに自分を含む子供達の中で育っていることに気づかされる。

1)−2　「社会的不滅」（創造的な活動による死の克服）

刊行年	書　名	概　　要
1952	*Charlotte's Web*	Fern という農場に住む少女が、発育不良であった子豚の Wilbur の命を助けること、そして、見事なクモの巣を紡ぐことによって、クモの Charlotte が年老いて太った豚の Wilbur を助けるという二つの友情の物語。物語の最後に、クモの Charlotte は、自然の成り行きとして、自分の命と引き換えに子供達を産むが、物語に登場する人物らは、これらの多くの子孫と同様に、Charlotte の素晴らしい偉業も、彼女の死後、生き続けることを理解する。

1)−3 「自然的不滅」（身体を地に返すことによる死の痛みの克服）

刊行年	書　名	概　　要
1971	*The Tenth Good Thing about Barney*	ペットの猫 Barney が死んでしまった時、その死を悼む記念礼拝で述べる Barney についての良いことを 10 個考えようと、少年は母親から提案される。最後のひとつを思い悩んだ末、10 番目の良いことは、死んでしまった Barney は土の中で、これから花を育てるための手助けになっているということだと、少年は理解する。

1)−4 「神学的不滅」（死後の世界、あるいは神との出会い）

刊行年	書　名	概　　要
1999	*Serafina's Silver Web*	病気の子供を、奇跡を起こすような冒険に連れ出す不思議なクモの物語。Peter は、死に対する恐怖についてクモの Serafina に話すと、彼女は、死は旅と同じようなものであり、恐れる必要はないこと、そして自分にとっての地上での時間が終り、古くなった身体から離れるが、じきに二人は新しい旅でスピリットとして出会うのだと説明する。
1973	*A Taste of Blackberries*	Jamie という少年の死に直面した親友は、この予期せぬ出来事を振り返り、これは本当に起こったことなのか、防ぐことはできなかったのか、彼が死んでいるのに、自分たちが生き、食事をしているのは不誠実ではないか、と質問を両親に投げかけるが、納得のいく回答が得られずにいる。しかし、少年は、自分に対して共感の気持ちを示す隣人の Mullins 夫人とその疑問を共有することによって、完全に満足のいく回答が得られない疑問もあること、生や死についての知識に限界があることを認めることが最良な場合もあるということを諭される。

2）「関係性」

「関係性」は、死をテーマとした児童文学において中心的なスピリチュアルなテーマである（372）と述べ、ここでは、1)「記念的儀式に共に集まること」2)「悲しみを支えるものを探し求め大人や友達とともに集まる子供達」3)「残されたもの」4)「思い出」5)「継続している関係」の五つの描写方法を提示している。

2)−1 「記念的儀式に共に集まること」

刊行年	書　名	概　　要
1958	*The Dead Bird*	物語は、子供達が、野生の鳥が横たわって死んでいることに気が付くところから始まる。その鳥の死骸を小さなお墓に埋葬し、大人達をまねて儀式を行う。その後、毎日弔いのためにその場所を訪れる。
1979	*We Remember Philip*	Hall 先生のクラスの生徒達は、先生が悲しみに苦しむ様子を見て、先生の息子が山登りの事故で亡くなったことについての説明を求める。それを契機に、Hall 先生は生徒達とスクラップブックや思い出を共有することができるようになり、最終的に、生徒達と彼らの親、そして校長先生の手助けによって、クラスの記念樹を植えることになる。
1992	*Robert Nathaniel's Tree*	家族に新しい赤ちゃんがやってくるのを楽しみにして待っている少年に、赤ちゃんの死が知らされる。時間は必要であるが、少年は、記念の木を世話し、その木を死んでしまった弟であると思うことによって、慰めを見出していく。

2)−2 「悲しみを支えるものを探し求め大人や友達と共に集まる子供達」

刊行年	書　名	概　　要
1971	*The Mother Tree*	11 歳の Tempe と 4 歳の妹 Laura は、母の死後、二人が共に戻れる場所として母なる木を持つ。この裏庭にある大きな木は、姉妹が共に、母親との良い思い出の中に、心地よさを感じることができる心の避難場所（spiritual refuge）としての意味を持つことになる。
1974	*My Grandson Lew*	6 歳の Lewis と母親は、祖父の死後、彼の死を悲しみ祖父の思い出を共有する。母親は息子とともに、祖父のことを思い出すことができ、思い出しさえすれば、寂しくないのだと考える。

2)−3 「残されたもの」

刊行年	書　名	概　　要
1995	*The Last Dance*	愛する人々は、彼らの物語が語られる限り、決していなくなることはないと言う父の言葉を受け、祖父の死後、ダンスが好きな姉妹は、どちらが死んでもお墓に来てダンスをしようと誓いあう。姉妹は、共に豊かな人生を共有し、死後でさえ二人の愛は続いていく。
2000	*Lost and Found: Remembering a Sister*	ある少女は、亡くなった姉の愛情を感じることができる多くの方法を知っている。少女は、たとえ死んでしまっていても、姉は決して失われることなく、心の中に存在し続けることを知っている。

2)−4 「思い出」

刊行年	書　名	概　　要
1984	*Dusty Was My Friend*	友達 Dusty を交通事故で無くしてしまった 8 歳の少年が、両親の手助けにより、自分の気持ちや喪失の悲しみを表現し、最終的には Dusty と共有した素晴らしい時を思い出すことによって、自分の人生を進んでいくことができるようになる。
1992	*Badger's Parting Gifts*	年老いた Badger が自分の死が近いことを知り、友達のことを心配するが、友達と共に残した特別な思い出の中に、また、その思い出を他者と共有する時に、慰めを見出すことができるということを知る。

2)−5 「継続している関係」

刊行年	書　名	概　　要
1990	*Winter Holding Spring*	母親が亡くなった後の 11 歳の Sarah と父親の物語。初めは共通したものが何もなく、各々が痛みを感じていると思っていたが、徐々に、自分たちの経験や Sarah の母親の想い出を共有しあう。季節はそれぞれが、次に来る季節を含んでいるように、命、愛、悲しみも共に続く。Sarah は、愛は自分の中に生き、常にこれからも生き続けることを知る。
1995	*Too Far Away to Touch*	大好きな親戚の Leonard 叔父と Zoe という少女の関係を描いた物語。いつも冗談を言って笑わせてくれていたが、今は病気になって弱くなってしまった叔父が、ある日、プラネタリウムに Zoe を連れていく。叔父は、Zoe に、もし自分が死んだら、自分は星のようになる、あまりにも遠くて触れることはできないけれど、近くにいて見ることはできるのだ、と語る。

3）「超越性」

「超越性」は、死をテーマとした児童文学において、最も明確なスピリチュアルなテーマである（375）と述べ、1）「同じ現実の二つの側面」2）「変身」3）「もう一つの別の場所に生きること」の三つの描写方法を提示している。

3）−1　「同じ現実の二つの側面」

刊行年	書　名	概　　要
1974	*First Snow*	New England に住むために家族と共に、ベトナムからやって来た少女 Lien は、初めて雪を体験することを期待していたが、その矢先、両親から祖母の死が近いことを告げられる。ある日、祖母は Lien に庭に出て、天国に向かって手を向け、死に向かうとはどういうことかを理解するように言う。雪のかけらが指の上に落ちるとき、Lien はそれが小さく、つかの間のもの、きれいで繊細なものであると認識する。太陽が雪のかけらを小さなたくさんの虹に変えるとき、そのかけらは一滴の水滴になり、小さな松の木を育てる地面の上に落ちる。このことが、Lien に、生と死は同じことの二つの側面に過ぎないという仏教信者としての信仰を確認させる。
1992	*The Great Change*	アメリカインディアンである祖母は 9 歳の孫娘に、死はすべての終わりではないことを説明する。さらに、死は壊れることのない生命の輪の一部であり、その中で、私達の身体は魂が続く限り、母なる大地と共にあることを教える。

3）−2　「変身」

刊行年	書　名	概　　要
1982	*Water Bugs and Dragonflies*	Water bug（ヤゴ）のコロニーにおいての物語。仲間が植物の茎を登り、水際の境界線を渡った後戻らなくなったことに気づき、他の仲間らは、次に同じ道をたどって戻ってきた時には、何が起こったのか話そうと誓いあう。仲間は、これがトンボに変身するための出発であり、水の上の世界は新しく興奮するような経験であるが、水面を通り抜けたら、水面下へ戻ることができないことを知る。
1996	*The Cherry Blossom Tree: A Grandfather Talks about Life and Death*	祖父と 5 歳の Harriet は、毎年誕生日にピンクの花をつける桜の木を植える。ある年、その木が倒れているのを見た祖父は、桜の木はとても古くなり、死ぬ時期が来たのだと孫に伝える。生まれたものはいずれ死なねばならない。死は悲しいことだが新しい始まりでもある。神を愛する人は皆、死後、天国と呼ばれる今までとは異なる新しい場所へ行き、神と共にいることになると、祖父は伝える。Harriet と祖父は、その木が新しく美しい木になることを知り、桜の木の苗を植える。

3）−3　「もう一つの別の場所に生きること」

刊行年	書　名	概　　要
1989	*Losing Uncle Tim*	Tim 叔父が AIDS で亡くなった時、甥は「叔父さんは、どこか他の場所で、太陽のように輝いているだろう」という叔父の言葉の中に慰めを見出す。
1994	*Liplap's Wish*	Liplap というウサギの物語。初めて雪のウサギを作っている時、亡くなってしまった祖母のことを考える。そうすることによって、祖母が昔よく話してくれた年老いたウサギの話—最初のウサギ達が死んだ大昔、どのようにウサギ達は空の星になって、私達を見守り、私達の心の中で永久に輝いているのかについての物語を思い起こす。
1996	*Where the Balloons Go*	ある少年と祖母が、風船が空へと飛んでいくのを見た時、それらは風船の森へ行ったのだ、と祖母は言う。祖母の死後、少年は祖母に会いに風船の森へ飛んで行きたいと望むが、風船に愛のメッセージをつけて、解き放つことに決める。

4．考察

Corr が調査結果をもとに考察した内容は以下のとおりである。

1）スピリチュアリティに関連した問題に関して最も明確なことは、調査した物語の中には、多様なスピリチュアルな観点や、スピリチュアリティが持つ多くの側面が現れるということである。三つの基本的なスピリチュアリティのテーマのうちいずれか一つを含む物語もあれば、これら三つのテーマのうち複数のテーマを持ち合わせる物語もある（377）。

2）これらの本の中で語られた物語は、死に直面した際の人生の意味を探るのに有益な教材になる可能性を秘め、子供たちがスピリチュアルな問題について学び、大人と共にスピリチュアルの価値について共有するのに多くの機会を提供する（378）。

3）検討してきた本の多くは、死に関連した出来事やスピリチュアルな意味に関して子供達が抱くかもしれない疑問が正しいことを確証し、子供達がそのような出来事を理解する際に、生と死の境界を探求するのに信頼できる情報やガイダンスを必要としていることを認めている（378）。

4）これらの本の多くは、形式的であれ、非形式的であれ、思い出としての儀式や行いを描写する際に、スピリチュアルな価値と死別に対する建設的な活動を結びつけることによって、子供たちやその他の人々が死に直面しているときの「関係性」の役割や重要性を示している。基本的なスピリチュアルの価値は、①儀式としての葬儀、②死に関連した思い出作り、③互いを支えあうために皆が集まること、④残されたものを大切にすること、⑤亡くなった人の思い出の中に見いだされる慰め、⑥亡くなった人とのつながりを継続していく努力、という形で表現される（378）。

5）「超越性」のテーマは、①死と生は同じ現実の二つの部分である、②死は、我々が地上で知っている生から新しい生命の形への変化である、③亡くなった人は、今は別の場所で生きている、という表現方法で描写される（378）。

6）子供を対象とした死に係る物語の多くを、現在入手することができるが、それらの作品が捉える観点が多様であることは、このような文学におけるスピリチュアルな、あるいはその他の側面について、さらに詳細な分析を行う機会が十分あることを示唆している（378）。

Corr は、最後に、これらの見解が彼自身によるものであり、異なった結論に到達する研究者もいることも認め、結語としている。

Ⅴ．むすびに

死をテーマとした英米の児童文学を、スピリチュアリティという新しい視座から捉えた Corr の論考は、死をテーマとした児童文学を扱った数少ない研究の中でも、スピリチュアリティの特質である三つのテーマに焦点を定め、具体的な作品検討を行ったという点で有益な研究であるといえる。

三つのテーマの分類については、Corr も言及しているように、明確な分類が可能なのではなく、作品の中には複数のテーマが盛り込まれている場合もあることが窺える。したがって、どのように、スピリチュアリティが表象されているかについて、またどのような文学作品の内容分析が可能であるのかについて、更なる研究が必要であることは言うまでもない。

日本では、死をテーマとした絵本の意義について論究した研究や、死をテーマとした絵本をテーマ別に分類した研究[8] などあるものの、絵本において表現された死に関する詳細な研究は少ないように思われる。スピリチュアリティを含めた論考

に至っては、さらにその数は少ないと推測できる。それゆえ、本論で示唆されたCorrの論考の要旨は、死の表象とスピリチュアリティの観点から、死をテーマとした日本の児童文学を研究する際に、良き指針となるといっても過言ではないであろう。

「スピリチュアル」は、「身体的」、「精神的」、「社会的」に次ぐ第4の健康の定義の要素と考えられているように、心身ともにより豊かな生活を求める以上に、私たちが「スピリチュアル・ペインを持つ存在」[9]だからこそ目を向けるべき魂の有り様を理解するために必要な概念であるといえる。そして、複雑で捉えどころのない人間のスピリチュアルな（魂の）姿は、物語が成し得る特有な語りの手法によって描かれ得るものであり、これが、物語が持つスピリチュアル・ケアの一環としての役割であるといえるのではないだろうか。

今後、Corrの論考は、スピリチュアリティにも焦点を当てた死をテーマとした児童文学の研究に対して一翼を担うものであり、さらに、日本における児童文学との比較検討を行う際の基盤となることが期待される。スピリチュアリティが宗教に端を発したとはいえ、現在、宗教との関連性は薄れ、信仰如何にかかわらず、人間誰もが持つ特質と考えられていることを考慮に入れれば、東西を問わず、死をテーマとした児童文学において表現されるスピリチュアリティに共通したテーマが見出されることも予測されよう。

死をテーマとした児童文学のスピリチュアリティに焦点を置いた継続的な調査及び分析、日本と英米の児童文学との比較検討、さらに児童文学のみならず、他の分野の文学作品におけるスピリチュアリティへと研究を進めていくことは、死に直面している人々及び死別を経験した人々にとってのスピリチュアル・ケアの媒体として、また死の教育における教材としての文学の有用性を見出すために必要な課題であり、本論で検討したCorrの論考のみならず、それに付随した研究も、まさにその有意義な手引きとしての可能性を秘めているといえよう。

註

1 スピリチュアリティ（spirituality）という言葉の起源は、ラテン語の ‘spititualitas’ にあり、ギリシャ語の名詞 ‘pneuma,’‘spirit’ に由来する。中世では、‘the spirituality,’ というと、‘the clergy’（聖職者）の地位を示しており、17世紀のフランスでは、‘the spiritual life’ に関連した言葉として、名詞のみが確立された。スピリチュアリティという言葉は、19世紀の終わりから20世紀の初めまで神学の分野において姿を消していたが、20世紀には、キリスト教研究の分野において、再登場するようになる（Sheldrake 2）。

2 著者は、共同研究者とともに、日本及び英米の看護研究論文において、スピリチュアリティがどのように定義されているか、あるいは研究者らがどのような見解を持っているかについて比較検討した。その結果、ある程度共通したテーマが見られるも、一定した明確な定義は見いだすことは難しいことが分かった。

3 Charles A. Corrは、2004年発表の本論文を執筆した当時、南イリノイ大学（Southern Illinois University Edwardsville）の名誉教授であった。この論文を書く契機となった研究では、死をテーマとした児童及び思春期の文学に関して約170冊に及ぶ書誌情報も提供している。

4 「健康とは、完全な肉体的、精神的、スピリチュアル及び社会的福祉のダイナミックな状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない。」というのが、1998年に新しく提案された健康の定義である。「ダイナミック」は、健康と疾病は別個のものではなく、連続したもの、「スピリチュアル」は人間の尊厳の確保や生活の質を考えるために必要で本質的なものだという観点から付加することが提案されたといわれている。

5 Elizabeth Kublor Ross（1926-2004）は、スイス生まれのアメリカ合衆国の精神科医。死と死ぬことについての書『死ぬ瞬間』（*On Death and Dying*, 1969）の著者であり、否認、怒り、取引、抑うつ、受容の5段階から成り立つ、死の受容過程と呼ばれる「キューブラー・ロス・モデル」を提唱した。

6 カトリック系の施設で用いられることが多いが、パストラル・ケアの提供者、チャップレン（chaplain：病院、学校等の施設付きの司祭、牧師）と同義である。パストラル・ケアを必要とする人々に寄

り添い、心のケアを行う。これらは、欧米では古くから使われている言葉であるが、日本では、ビハーラ僧、臨床僧という比較的新しい職名で表現されている。

7 Tanyi は、30 年間に及ぶ文献からスピリチュアリティについて 79 論文と 19 の著書による概念分析によって、今日の健康、看護に関連したスピリチュアリティの意味を明確にした。一致した定義が見いだせないものの、多くの看護研究者が「超越的存在」、「明かされない神秘」、「関係性」、「人生の意味や目的」、「より強い力」をスピリチュアリティの定義として挙げている（501-2）。このような Tanyi の定義の一部は、Corr がスピリチュアリティのテーマとして挙げた三つのテーマに類似することが窺える。明確な定義ではないとしても、これらのテーマを、スピリチュアリティの特徴と捉えることに対しての正当性が示されているといえる（下線部は筆者による）。

8 大学において、死生学の授業を担当する片桐は、生と死をテーマとした 90 冊の絵本の収集を行い、絵本の構成（A. 物語本、B ドキュメンタリー絵本、C. ガイドブック式絵本、D. ワークブック式書き込み絵本）を基にした分類、テーマ（A. 父母の死、B. 祖父母の死、C. 兄弟の死、D. おじさん、おばさんの死、E. 友達の死、F. 動物の死、G. 主人公である動物と死、H. 円環的いのち、I. 死の概念、及びグリーフ教材、J. 喪失によるトラウマとそこからの解放）による絵本の分類を行った。読書療法の立場から、「物語が情緒を刺激し、読み手の人生観を発達させる」などの心理的効果があることを示すとともに、物語絵本は、死別の直接体験はそのグリーフ・ケアの一助として、死別体験のない人々にとっても、死の間接体験による学びとして有用である（114）と言及している。

9 1967 年に現代ホスピスのモデルとされる聖クリストファー・ホスピス（St. Christopher's Hospice）をロンドンに設立したシシリー・ソンダース（Cicely Saunders, 1918-2005）が、人間を「スピリチュアル・ペインを持つ存在」として認め、ホスピスにおけるスピリチュアル・ケアの重要性を説いた。

引用文献

［欧文文献］

Comellas, K.R. 2014. "A Less than Perfect World: Representation of Death in Award-Winning Picture Books." Dissertation. Florida State University.

Corr, C.A. 2002. "An Annotated Bibliography of Death-Related Books for Children and Adolescents." *Literature and Medicine* **21**(1): 147–174

Corr, C.A. 2004. "Bereavement, Grief, and Mourning in Death-related Literature for Children." *OMEGA* **48**(4): 337–363

Corr, C.A. 2004. "Spirituality in Death-related Literature for Children." *OMEGA* **48**(4): 365–381

de Souza, M. 2016. *Spirituality across Disciplines: Research and Practice.* Switzerland: Springer International Publishing.

Delisle, R.G. & Woods, A.S. 1976. "Death and Dying in Children's Literature: An Analysis of Three Selected Works." *Language Arts* **53**(6): 683–688

Lamers, E.P. 1995. "Children, Death, and Fairy Tales." *OMEGA* **31**(2): 151–167

Lifton, R.J. 1979. *The Broken Connection*. New York: Simon & Schuster.

Lowe, D.F. 2009. "Helping Children Cope through Literature." Forum on Public Policy. Web. 25 Oct. 2018. 〈https://files.eric.ed.gov/fulltext/EJ864819.pdf〉

Malcom, N.L. 2011. "Images of Heaven and the Spiritual Afterlife: Qualitative Analysis of Children's Storybooks about Death, Dying, Grief, and Bereavement." *OMEGA* **62**(1): 51–76

McSherry, W. and Jolley, S. 2009. "Meeting the Spiritual Needs of Children and Familie," Price J, McNeilly P (eds) *Palliative Care for Children and Families: An Interdisciplinary Approache*s. Basingstoke: Palgrave Macmillan. 88–106

Murray, R. and Zentner, J.B. 1989. *Nursing Concepts for Health Promotion*. London: Prentice Hall.

Romero, C. 1976. "Children, Death and Literature." *Language Arts* **53**(6): 674–678

Salonen, L. 2008. "The World's Full of Amazing Thing: Death and Spirituality Represented to Children in E.B. White's *Charlotte's Web* and David Almond's *Skellig*." Dissertation. University of Tampere.

Schroth, K.C. 2017. "Literary Representations of Death, Dying and Bereavement in Children's Literature." Dissertation. University of St. Andrews.

Seibert, D. & Drolet, J.C. 1993. "Death Themes in Literature for Children Ages 3-8." *Journal of School Health* **63**(2): 86–90

Sheldrake, P. 2013. *Spirituality: A Brief History*. West Sussex: Wiley-Blackwell.

Snoddy, A. 2014. “Death and Dying in Adolescent Literature.” Dissertation. Bowling Green State University.

Tanyi, R.A. 2002. “Towards Clarification of the Meaning of Spirituality.” *Journal of Advanced Nursing* **39**(5): 500–509

［和文文献］

安藤泰至　2008「「スピリチュアリティ」概念の再考」東洋英和女学院大学死生学研究所編『死生学年報』4巻

鵜生川恵美子、中西陽子　2018「看護研究論文からみるスピリチュアリティの定義　―日本と英語圏諸国の比較検討―」『群馬県立県民健康科学大学紀要』13：1–13

片桐史恵　2005「絵本から学ぶ生と死」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』6：111–119

河合隼雄　1996『子どもの本を読む』講談社

窪寺俊之　2004『スピリチュアル・ケア学序説』三輪書店

宗教情報センター　Web 4 Jan. 2019. 〈https://www.circam.jp/reports/02/detail/id=3193〉

日本WHO協会　Web 4 Jan. 2019. 〈https://www.japan-who.or.jp/commodity/kenko.html〉

柳田邦男　2006『大人が絵本に涙する時』平凡社

やまだようこ　2014「喪失の物語とスピリチュアリティ」企画・編／鎌田東二『講座スピリチュアリル学　第2巻　スピリチュアリティと医療・健康』ビイング・ネット・プラス

［引用作品］

Brown, M.W. 1958. *The Dead Bird*. Reading, MA: Addison-Wesley.

Clardy, A.F. 1984. *Dusty Was My Friend: Coming to Terms with Loss*. New York: Human Sciences.

Coleman, P. 1996. *Where the Balloons Go*. Omaha, NE: Centering Corporation.

Coutant, H. 1974. *First Snow.* New York: Knopf.

Deedy, C.A. 1995. *The Last Dance*. Atlanta, GA: Peachtree.

Dragonwagon, C. 1990. *Winter Holding Spring*. New York: Atheneum/Simon & Schster.

Earley, C. 1975. *The Garden Is Doing Fine*. New York: Atheneum.

Evenson, I. 1999. *Serafina's Silver Web*. Richmond, VA: Noah's Children, Inc.

Godfrey, J. 1996. *The Cherry Blossom Tree: A Grandfather Talks about Life and Death.* Minneapolis, MN: Augsburg Fortress.

Horn, G. 1992. *The Great Change.* Hillsboro, OR: Beyond Words Publishing, Inc.

Jordan, M.K. 1989. *Losing Uncle Tim*. Morton Grove, IL: Albert Whitman & Co.

London, J. 1994. *Liplap's Wish*. San Francisco: Chronicle Books.

Newman, L. 1995. *Too Far Away to Touch*. New York: Clarion Books.

Schlitt, R.S. 1992. *Robert Nathaniel's Tree*. Maryville, TN: Lightbearers Publishers.

Simon, N. 1979. *We Remember Philip*. Chicago: Whitman.

Smith, D.B. 1973. *A Taste of Blackberries*. New York: HarperCollins.

Stickney, D. 1982. *Water Bugs and Dragonflies.* New York: Pilgrim Press.

Stull, E.G. 1964. *My Turtle Died Today.* New York: Holt, Rinehart & Winston.

Varley, S. 1992. *Badger's Parting Gifts*. New York: Mulberry Books.

Viorst, J. 1971. *The Tenth Good Thing about Barney*. New York: Atheneum.

White, E.B. 1952. *Charlotte's Web*. New York: HarperCollins.

Whitehead, R. 1971. *The Mother Tree.* New York: Seabury.

Yeomans, E. 2000. *Lost and Found: Remembering a Sister.* Omaha, NE: Centering Corporation.

Zolotow, C. 1974. *My Grandson Lew*. New York: Harper & Row.

（2019年2月5日受理）